

所蔵資料紹介

阿波の絵図

Part I

徳島県立文書館

展示絵図の概説

県立文書館では、近世の絵図を計画的に収集しております。現在、国立史料館の蜂須賀家文書のうちの阿波国絵図33図を、ダイレクトプリントという特種な撮影による方式で収集しております。今回、その一部を紹介します。

【阿波国絵図】（展示室中央）

原図は4メートルを越える大絵図。文字の読める程度に180×200mmに縮小撮影したもの。正保3年12月朔日（一日）の年紀がある。那東・那西・板東・板西・以西などの郡名は、寛文4年（1661）まで使われていた。

《阿波国十三郡絵図》（左・奥）

年紀はないが、13郡の名があることから考え、正保図に近い時期と推定できる。

《目黒御屋舗絵図》（左・手前）

江戸の藩屋敷の見取り図。年紀なし。「屋舗」は屋敷と同じこと。

《淡路国絵図》（右・奥）

淡路国は蜂須賀の領地であった。年紀なし。

《阿波国滑津城下の絵図》（右・手前）

滑津は徳島の別称として使用された。年紀なし。

絵図のあらし

わが国の地図の最初は、大化2年(646)にさかのぼる。大化改新の直後に、朝廷は諸国に地図の作製を命じた記録が『日本書紀』に残っている。

阿波の絵図の最古のものは、天平勝宝3年(751)の「阿波国名方郡新嶋庄絵図」(正倉院蔵)である。

【国絵図の作製】

江戸時代に至り、徳川幕府は慶長十年(1606)を最初として、寛永十年(1633)、正保元年(1644)、元禄十年(1697)、天保六年(1835)など数度にわたり、諸国大名に国絵図の製作提出を命じた。

正保図以後、幕府の担当官は大目付・勘定奉行などが当たり、本郷に御絵図小屋を立て、狩野派の絵師に諸国一定の絵図を書かせた。正保図以後の国絵図は、1里(4キロ)を6寸とする2万1600分の1の縮図で、阿波国絵図は1辺が4メートルを越える大絵図である。

これらの幕府に提出した国絵図のうち、正保図・元禄図はほとんど残っていないが、天保図(83枚)は現在も、内閣文庫(国立公文書館蔵)に保存されている。

国絵図は諸国からの情報に基づき製作したもので、実測図ではなかったが、方位・地形・道路・山川・境界などかなり正確なものであった。郡名・石高などは公文書(「郷帳」)と一致していることからして、支配のために作製されたことをうかがわせるものである。

【阿波の絵図】

日本の地図で初めて実測に基づいて製作されたのは、文政4年(1821)に伊能忠敬が完成した「大日本沿海輿地全図」(「日本輿地全図」「実測輿地全図」とも呼ばれる)である。

忠敬は全国を測量したが、文化5年(1808)には阿波にも来訪し、沿岸の測量を行った。この時、忠敬の測量に従った阿波の人に山瀬佐蔵・竹内武助(岡崎宜平)がいる。山瀬佐蔵は後多くの村絵図を製作している。村絵図は、村単位の絵図で、一軒一軒正確に生け垣まで描かれたものもある。

阿波の絵図では、蜂須賀家が幕府に提出するために作製した控えと考えられる絵図が蜂須賀文書の一部として、国立史料館に収蔵されている。